

# 第26回研究会より

平成29年8月5日

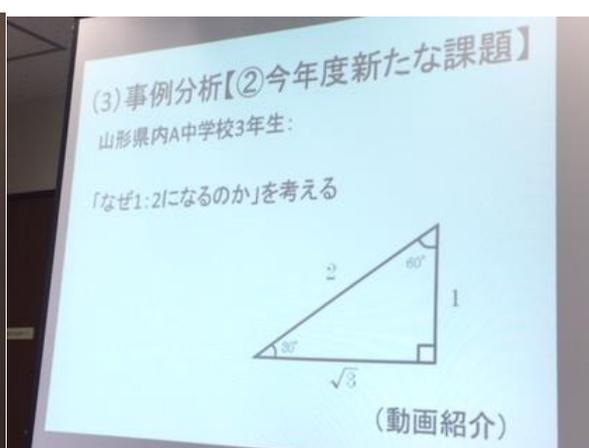
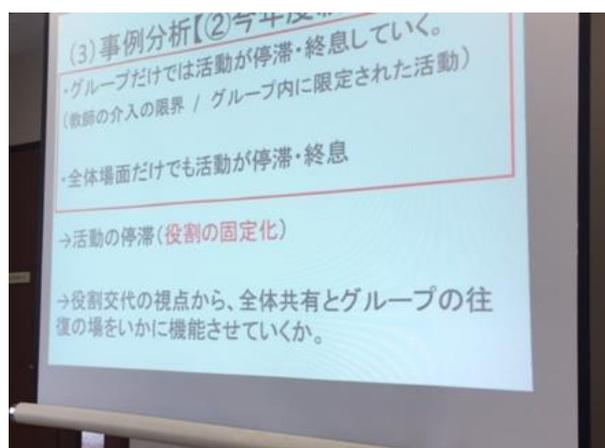
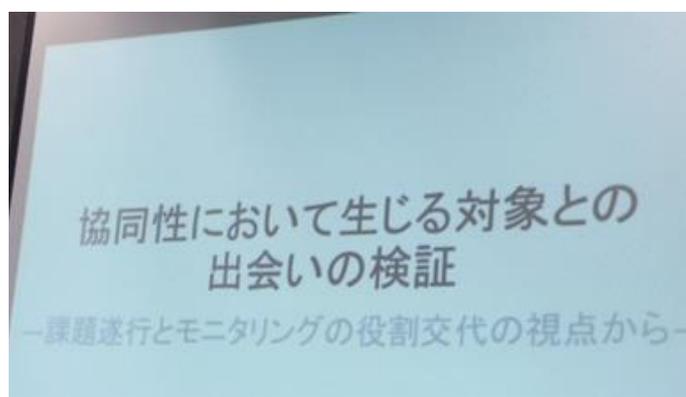
参加者 6人

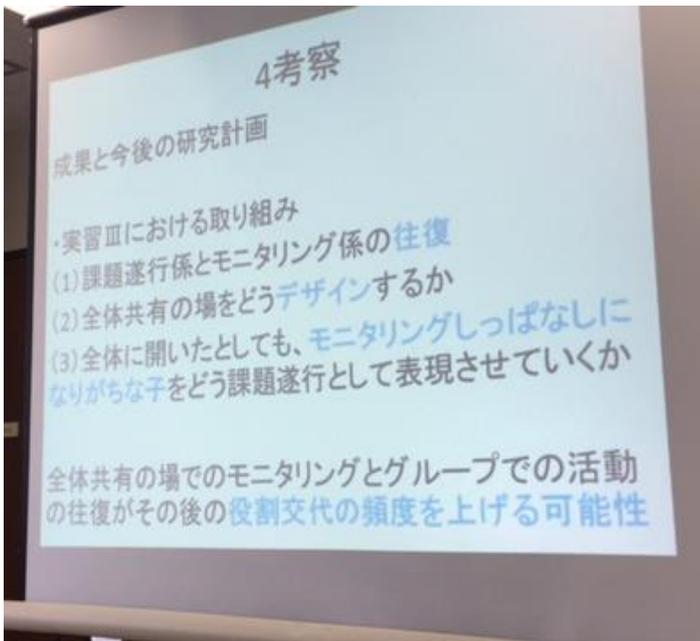
会場：雪の里情報館

さて、今回は森田先生はいらっしゃらない、会員の方々だけの、久しぶりの研究会でした。本会がスタートした最初の頃のような、自分たちの手で行う研究会の大切さを実感しました。

今回のプログラムの前半は、山大教職大学院で学ぶ佐藤さんの研究論文（中間）を発表していただき、参加者で議論しました。後半は、佐伯 胖著『「わかり方」の探求』のP21～P46の章を事前に読んできて、参加者で難解な個所を議論するものでした。

佐藤さんの論文より





グループの学びが停滞したときの、教師の働き掛けについての研究でした。実際の授業場面を動画で切り取っての説明で、論が最初から最後まで一貫して、参加者も大いに刺激をうけました。

人の学びには、課題遂行係とモニタリング係の2つの役割があって、その役割の往復回数が多ければ多いほど、学びは深まっていくという研究です。

参加者は実際の自分の授業場面などを通して議論を深めました。

役割とは、互いの思考に寄り添うこと。寄り添うことを児童生徒が行うためには、教師自身が授業場面で、児童生徒のわからなさにつきあうモデルを見せることが必要ではないかという議論に進みました。最後は、義務教育学校での前期課程での学習の重要性や、現在の教育施策の問題点などに行き着きました。

佐藤さんの研究からスタートした議論は、授業者の自由度を狭めないようにしたいという現場で働く教師たちの願いがゴールとなった、大変面白い議論でした・



前半の議論がかなり長くかかり、後半の『わかり方の探究』の読み込みには十分な時間がかけられませんが、それでも、参加者の問いから発生された学びあいは深まりました。

P29 2行目：「有害」、10行目：「副作用」、14行目：「基礎的」

P30 10行目：「文化的意義の明らかな文脈で「できるようになる」

このような個所から学びあいを深めました。富塚さんの、社会科での気候帯を教える際に、沖縄旅行を課題にすることをヒントに、「最適な沖縄旅行の時期」という課題を具体例にしながら議論は進みました。

今回は、P35以降から、再び学びを深めたいと思います。